

■平成 27 年度 第 2 回 静岡市歴史文化施設建設検討委員会

- 1 日時 平成27年7月3日（金）14時00分から
- 2 会場 静岡市役所静岡庁舎 本館3階 第一委員会室
- 3 出席者 [委 員] 熱川裕、今村直樹、櫻井典子、杉澤恒、杉山朋子、谷直樹、
中村羊一郎、松川満嘉、森田みか
[事務局] 観光交流文化局長、観光交流文化局次長
歴史文化課：丸岡課長、岩田課長補佐、花村副主幹、小泉主査
稲森主査
- 4 欠席者 [委 員] 望月敬剛
- 5 傍聴者 9名
- 6 報告 (1) 第1回検討委員会の主たる意見について
(2) 検討の進め方について
- 7 議事 (1) 展示内容について
(2) ビジターセンター機能と博物館機能の関連性について
- 8 会議内容
 - (1) 開会
 - (2) 観光交流文化局長あいさつ
 - (3) 報告
「第1回静岡市歴史文化施設建設検討委員会概要報告」にて説明
 - (4) 議事

○委員長:今日は非常に具体的なかたちでの内容に踏み込んでいくことになると思います。
とにかく、この施設は、静岡市にとってまさにゼロから出発するものでございまして、そ

ういう意味で言いますと、各委員の皆さま方のご意見は大変大きな意味を持っていると思います。

前は主にビクターセンター機能についてお話をいただいたわけですが、その中で博物館との関連性をうまくイメージできないといったご意見も結構ございました。この 2 つは全く別の施設ではなくて関連性を持ったものであり、それがこの委員会で議論していくという意味で、あえて博物館と言わずに歴史文化施設という言い方をしているのも、そこに 1 つの理由があると思います。

以上の点を押さえたうえで、先ほど事務局から説明がありましたように、まず博物館機能の中心となる展示内容について、議論をしていきたいと思います。

①展示内容について

○委員長：それでは、議事 1、展示内容につきまして、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局：資料 1、2、3、4 にて説明。

○委員長：ここに提示されました展示の基本的な考え方、組み立て等についてのご意見を、ぜひいただきたいと思います。

以前に、いわゆる歴史博物館の基本構想を考えたときに、今川、家康の時代、東海道という 3 つの柱がありました。これをどういうふうなかたちで構成していくかということについての、ひとつの回答でもあるのではないかと思います。

従いまして、そうした中から、家康公を中心とした時代がここで大きくセンターに取り上げられているわけですが、こうした考え方を含めまして、それぞれご意見がありと思いますので、活発にご発言をお願いしたいと思います。

○松川：大御所とか、今川については十分これでいいと思うのですけれども、歴史をどう切り取るかという部分で、時間軸で切り取り得る空間という意味で、地域学習がすごく大事だと思います。これを充実させてもらいたいということが 1 つです。

もう 1 つがジャンルです。具体例で言うと、例えば文学です。『万葉集』の防人の歌は、中学校の教科書には必ず出てきます。それこそ「田子の浦ゆ」も、現在では薩埵峠で詠んだのだという定説になっております。あるいは、『伊勢物語』の東下りは、高校の教科書には必ず出ています。「駿河なる宇津の山」のところですか。そういうものがどこかに入ってくるのだけれども、すごく大事な素材です。中学生や高校生が目を向けるという大事な

素材を、もっとインパクトのあるかたちで提示したほうが良いと思います。

同じように、ジャンルということでは、民俗学があります。どこで、どんなかたちで、豊かな静岡の民俗教材を扱うのか。そのへんのいわゆるジャンルで切り取る場面も必要ではないでしょうか。そこがどこかにあるのなら、それをもう少しピックアップさせる必要があると思いました。

○委員長：確かにご指摘のように、古典文学等にかかわる項目が挙がっておりませんが、これをどういうふう to 処理するかは非常に大事な問題だろうと思います。

民俗学につきましては、前の委員会するときにもいろいろ話題になったのですが、何せ建物の面積が必ずしも思いどおりにならない状況があって、民俗の場合は別に考えたかどうかというような意見が出ておりました。それを、ご参考までにお伝えしたいと思います。

○櫻井：メインをつくるとすると、家康になるのだらうと思うのですが、私が知りたいのは家康とその前です。静岡というと、家康の前は登呂遺跡に行ってしまうようなイメージが強いので、登呂遺跡から家康に至るまでの戦国以前の駿府です。このところをどんなふうに充実させていくかが、問題ではないかと思いました。

○委員長：家康に至る前の状況について、今川の部分は触れておりますけれども、それ以前の、先ほどのプリントによりますと戦国以前の駿府ということで、比較的遠慮がちに左の部分に載っておりますが、このへんについては、事務局でご意見はありますか。

○事務局：通史につきましては、家康公を生んだ土壌をつくった静岡という中で、どのぐらいのスペースが割けるか分かりませんが、そういうところも展示していきたいです。

ただ、詳しいところにつきましては、地域学習のところ to 細かく入れていきたいと考えております。

○森田：全体が全部詳しく表現できれば一番いいのですが、どこかに華がぽんとあつたほうが、全体のインパクトとしては強くなると思っております。ここに至るまでの途中の委員会の中でも、通史の話や、民俗学の話もたくさん出て、それぞれ専門の分野の先生方がそれぞれ入れたいということもありました。静岡市として静岡市民に向ける部分もありますけれども、世界の方や、県外の方というときには、華のある歴史文化施設でないといけないということを考えると、大御所は家康で、昔はここが日本の首都だったという位置付けは、私はすごくいいと思います。

ここを中心にそのほかのものが組み立てられ、また、足りないところは企画展で、もし

かしたら補える部分があるのかもしれませんが。今、事務局で説明していただいた流れがいいのではないかなと思います。

ただ、前の委員の意見（前回の委員会の後で照会のあった「静岡ならでは」のものについて）をいただいているのですけれども、谷先生の案に私はすごくワクワクして、本当にこうなったらいいなと思ったのです。先に近代の静岡の模型がどんと来て、同じ場所が、大御所家康の 400 年前はどうだったという模型が次にやってきて、それで比較ができます。

これは最後の部分の展示の方法になるのかもしれませんが、イメージとして、昔首都だったこの駿府が、今はどうで、私たちの生活が家康のころとどうかかわっているのかを見せられるところが中心になってくれるといいなと思います。

○杉澤：旅行会社としての意見です。今の森田委員の意見と近いのですが、例えばわれわれ旅行会社が学校に説明するにあたって、メインで、ここに行けばこれが見られるということです。今の話で、家康にメインを絞っていることは分かるのですけれども、ともすると、これもある、これもある、これもあるとなりがちだと思います。静岡市の博物館はこれだというものが何かあるのでしょうか。

○委員長：あれこれ並べるだけではなくて、非常に多様なものの中からこれぞというのは、いろいろなところでこの言葉が出てきます。この図の中から何かご指摘できますか。事務局には何かお考えはありますか。

○事務局：イメージとして、きょうは久能山東照宮の金陀美具足を挙げさせていただいたところです。実際に今、静岡市で所蔵しているものは、これといったものがない状況にあります。将来的には久能寺経等を持ってくるということも考えられるのですけれども、それが今、杉澤委員が言われたメインになるのかということも、非常に疑問な部分もありますので、本日のこの委員会の中で、こういうものがどうかなというご提案もお願いしたいです。それにつきましては、来年度以降、展示設計の中で検討していきたいと考えています。

○委員長：ただ今の事務局の話をお聞きすると、ますます谷委員の 1 つのアイデアが示されたわけでありますので、簡単に概略をご説明願えますでしょうか。

○谷：今の静岡市街をみますと、戦災に遭っているのではないかなと思うのです。それでも、市役所や歴史建造物は残っていますので、今の市の景観からどこまでさかのぼれるかをビジュアルにしたいなというのが大きいのです。

博物館に来られる方で、特に市民の方からすると、ある種のアイデンティティーをどこ

に求めるかということで、静岡の場合は、登呂遺跡など教科書に出て来る有名なものがあるのですけれども、登呂遺跡と言われると、今の暮らしとなかなか結び付きません。一番結び付きやすいのは、映画などで『三丁目の夕日』が大はやりする昭和 30 年代です。私はこの戦災がどのぐらいの範囲で、どういうことだったのかが分からないのですが、昭和 30 年代の静岡のお城から市役所、駅前あたりはかなり大きな再現模型みたいなものがあると、ここはこうだったとかという話が、お客さんの中で自由にできると思います。

ただ、昭和 30 年代は戦災から復興してきて、まだもう一つ模型として見栄えがするかどうか分からないので、それなら戦前の昭和 10 年ぐらいのものでも構わないと思うのです。

しかし、静岡市の一番のルーツということでは、今川氏やいろいろなお話があるのですが、駿府城の前にあるということですから、駿府城ができたときにどんな町だったのかを、その模型と対比できるということです。つまり 3 段階です。現在は皆さんが知っています。それから、戦前ないしは戦後の近代のある段階の模型があります。その上に、これは私どもの博物館にあるのですけれども、今ある模型が地面に沈み込みまして、上から下りてくるわけです。その下りてくるのが駿府城の時代の模型にすれば、一目で静岡の変遷が分かります。

それを、この展示場の中ではなくて、無料コーナーに置いてほしいというのが、私の考えです。前回議論をしましたように、ビジターセンターの一番中心になるものは何かということで、お茶とか、富士山という話もあるのですけれども、ここに出てくるものが静岡の歴史博物館の 1 つの構成要素になるとすれば、頭出しをちゃんとしておかなければいけません。そうしないと、全然違うものがあって、ここに歴史博物館があるのですと言っても、市民の方はそちらへは行きません。

つまり、こういうものがあれば、これをもっと知りたいとなると博物館に行かなければいけないという動機付けにかなりつながってくると思います、この間のご提案をしたような次第です。

ただ、いろいろ疑問もあります。これは質問ですが、例えば、対象のところに市外、県外、あるいは海外からの観光客とありますけれども、市外、県外、海外の観光客がどの程度具体的な数字としてあるのですか。対象として書くのはいいのですけれども、裏付けがちゃんとあるのですか。

県外と言いますと、私も今日は京都のほうから来ましたけれども、便利な新幹線は 1 時

間に 1 本しかないのです。こだまで来るとあちこち止まるので結構不便なのです。そういう誘致がちゃんとできる可能性があるのですか。特に海外の方は、どの程度の人数が考えられるのかによって、多少このストーリーは変わってくると思います。

それからもう 1 つは、市内の小中学生が 5 万人と書いてあります。これは、小学校 3 年生から中学 2 年生までの全体の人数だと思うのですが、そんなに毎年は来ないです。つまり、ある学年しか来ないのです。そうすると、これは 1 万人を切ってしまうと思います。そういう数字のからくりみたいなのを私はよく分からないのですけれども、こんなことを下手に書いてしまうと、後々縛られてしまって、入館者数のところに出てくるので、できるだけきちんと正確に書いておいたほうがいいということが 1 点です。

それからもう 1 つは、今日のこのストーリーの中で、先ほど展示物は 0 だとおっしゃいました。常設展は必ずしもそうでもないのですが、その中には実物が欲しいです。新しい博物館で実物となると、考古学の発掘された資料です。実物資料は非常に大切なものです。そういうものがなかなか入り込む余地がなくて、鎧とか、古文書、屏風というものかなと思うのですが、レプリカが多いと思います。特に古文書は、専門家には分かるのですけれども、ここで対象としている小中学生、あるいは海外からのお客さまに対しては、なかなかインパクトがありません。例えば、工芸品、彫刻、場合によっては、よくうちの博物館では仏像とか仏画を展示してありますけれども、この中では家康公が中心ですので、なかなかそれが入りきらない気もいたします。

そのへんの展示物のある種の目玉ですが、頭で考えてストーリーをつくるというのではなくて、博物館というのはもので語っていくところですので、ちょっとここでは少し上滑りのような感じがするのです。

例えば、家康公の長寿を支えた駿府の魅力と書いてありますが、これは一体何を展示するのか。本では分かるのです。だけど、この展示物がどの程度、説得力があるかというのは、もっと検討しなければいけないというのが、次の質問です。

それから、この展示のコースで非常に苦心されておられる「テーマ性を持った通史展示」と書いてあります。テーマ性を持った通史展示と聞くと、なんとなく納得はできるのですが、けれども、こんな中途半端なものはないです。よく言われるのですが、民博（国立民族学博物館）の梅棹忠夫先生が、民博の展示は 3 種類の動線、コースがありますとおっしゃいました。1 つは、VIP コースで、本当に目玉だけを 30 分で案内するコースです。それから、小学生、中学生が、ある意味で学習として見ていくコースです。それからもう 1 つは、リ

ピーターが前回来たときに発見できなかった、あるいは、常設展といっても展示替えがありますので、期間限定でしか見られないものです。これは企画展示だけではなくて、常設展示も必要です。

これは、そういうお客さんに合わせたストーリーになっていなくて、どちらかといえば最初から最後まで全部見なければいけません。最初のコーナーは一生懸命見るのです。ただ、本当に見せたいところでみんな疲れてしまって、すっとうってしまうというのが、どこの博物館でもみられます。だから、最初は大体考古の展示なので、ずらっとたくさん並んだところを一生懸命見て、真ん中になると、大体、古文書が多いからもうほとんど印象をもたずに帰ってしまいます。

そういう点を考慮すると、このストーリーはなかなかしんどいかなと思います。これは、テーマ展示が通史に来ているのです。そうすると、テーマ展示が家康公だけで本当に持つのかどうかです。これで通史をやっていくところに多少無理があるのかなと思います。

つまり、戦国以前の駿府は、ほとんどコーナーでしか扱っていません。それから、先ほど私が申し上げた近代以降の、戦前はもちろんですが戦後の暮らしがほとんど丸 1 つで、戦災からの復興ぐらいしかありません。でも、今の人たちは、そここのところがすごく面白いのです。しかも資料を集めるとしたら、そのへんの資料がたくさん集まってきます。そういうところの受け皿がちょっと少ないので、ストーリーとしては悪くないと思うのですが、このやり方は、実際にできたときに、お客さんが本当に魅力を感じて見られるでしょうか。あえて言うと、上から目線の展示という感じがします。

もっと庶民からの目線もないと共感が湧かないのです。家康公が偉かったということはいいのだけれど、家康公は偉かったということで親しみのあるところに行かず、しかも静岡は家康だけかという話になってくると、ちょっと話が違います。最初におっしゃった民俗学とか、文学とかも上手に採り入れるストーリーが必要かなと思いました。

私の提案したものは、実際に検討すれば、こんな高いものはできないという話になるかもしれません。それも踏まえてあえて言ったのですけれども、そういうものが無料コーナーにあって、そいつが引っ張って行って、中に入っていけばこういう展示がありますということで、できれば通史展示は、小学校の教科書に出てくるような少しなじみのあるものをもう少しちりばめたほうがいいでしょう。登呂遺跡は、別に博物館があるから意図はいいのですけれども、教科書に出てくるものがないというのはちょっとしんどいです。

今の小学校 3 年生には、昔の暮らしという単元があります。昔の暮らしはいつだという

と、お父さんの時代、おじいちゃん・おばあちゃんの時代です。おじいちゃん・おばあちゃんの時代は、小学校 3 年生からは見たら僕らの時代なのです。昭和 30 年代は、もうおじいちゃんの時代なのです。

カラーテレビの前は白黒テレビで、僕らにはラジオというものがありますが、子どもにすれば、ラジオにあまりぴんと来ないのです。昔の暮らしというと、われわれは「たらいで洗濯」と思いますけれども、30 年代の後半にたらいで洗濯していた家はもうほとんどなくて、電気洗濯機になっているわけです。二層式とか、手回しでした。

そういうところが面白くて、例えば電話の展示をしていると、線があるだけで今の子どもはびっくりします。それから、回転ダイヤル式電話機を展示してあると、回せないのです。穴を押すのです。それぐらいの時代になっているのです。

だから、そういうこともよく踏まえた近現代というか、つい最近の展示をやるということも大事です。そういうところが大きいと、逆に市民から寄付してもらったり、「うちもこんなものがあるよ」となってきたり、市民ぐるみの博物館になりやすいと思います。

これでは、いわゆる歴史が前面に出過ぎていて、できれば、そういうストーリーが通史展示としてあって、部屋としては、それに並行して今川とか、家康、東海道で、昭和 30 年代の部屋が別にあってもいいかもしれません。その部屋の大きさは、家康を大きくしたりするのは構わないと思うのですけれども、日本の首都、駿府のまちづくりも部屋にして、ぶら下げたほうがいいと思います。それは割とよくやる博物館の手法なのですけれども、よくやるというのが、ある意味ではこなれていると思いますので、この手法では通史があまり出ずに、家康というテーマがあまりにも突出して出過ぎている感じがして、初めて見たときに奇異な感じがしました。

○委員長：ありがとうございました。非常に具体的なかたちで、ご提案も含めたご意見をいただきました。非常に大事なキーワードがあったと思うのですが、共感という言葉です。これは、逆に言えば、子どもたちも含めた全ての人たちに対して、この博物館が何を訴えることができるかという根本にかかわる問題だろうと思いますので、このキーワードはぜひ大切にしていかなければいけない気がいたします。

その他の細かい点につきましては、例えば日常の暮らしについては、前の委員会の中でも、昭和 39 年、つまり東京オリンピックまでの暮らしの実態は今なら集められるから全部集めようではないかという提案をしたこともございます。それは、視野のどこかには入っているのだらうと思いますが、今出されました事柄も含めまして、また、いろいろなご意

見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

○今村：谷委員からご発言があった共感というところを考えていました。この展示ですと、地域学習があるので地域の話が出てきますが、静岡市はすごく広いので、駿府以外のいわゆる中山間部の問題をどう考えればいいのかということは、地域の人々のアイデンティティーの問題ともかかわる大事な話だと思います。

その際に、例えば、駿府の町のことを家康の時期で取り上げるとしても、それは地域社会との関係で成り立っているというお話を、地域学習の中に入れてもいいかもしれませんし、駿府とのつながりのところで入れていったらいいのではないかと考えています。

古文書そのものは、一般の人々に見ていただいたとしても、なかなかイメージしづらい、分かりにくい点があると思うのですが、静岡市がずっとやっつけてくださっている古文書調査事業の中で、さまざまな文書が出てきました。その中には地域の景観を復元できるような、例えば江戸時代における茶産業で、山間部に茶の作付面積がどれくらいあったというものもあると思います。そういったものを基にして、景観復元みたいなジオラマのようなものをつくって見たらどうでしょうか。そこでつくられた茶は駿府の町に輸送されていました。さらには、安倍川の支流にいかだを流して、材木を駿府に送っていたのですが、切り出した板が江戸城の材木になったという話もあるのです。これは海外の人から見たらどうか分からないですが、ターゲットは市民の方々という点では、共感というところで、地域社会と駿府のつながりを入れていくことが大事ではないかと感じました。

○委員長：今の中山間地等の扱い等については、駿府周辺の歴史という意味で欠落させることはできない問題だと思います。これは検討しなくてはいけないことだと思います。

○杉山：皆さんのご意見を伺いながら思ったのですが、私がこれを最初に見たときに、いつも静岡市民の展示会とか、県立美術館の展示会とか、仕事柄一緒にやらせてもらっているので、どうやったら人が行くかなといったときに、この展示の単なるイメージですが、なんとなく展示する側、発信する側の自己満足で終わってしまうのではないかなという感じがしてしまいました。

静岡市の方は割と新しいもの好きだったり、変わったもの好きだったりして、いつも一緒のことをやってもたぶん人は動いてこないと思うのです。なので、通年であったり、テーマ性を持ったりしていても、どこかアレンジが利くとか、あの施設はいつも元気でなんか面白いことをやっているよというのが要所要所があれば、われわれのようなマスコミ側も、ここが面白そうだよという取材も来るだろうし、取り上げるだろうと思いました。

今回の静岡市美術館の展覧会も一緒にやらせてもらったのですが、外国人はほとんど来ないのです。企画展なので、外国の方はあまり来ないものがほとんどなのですが、静岡の駅にあんなに近くても、外国の方はいらっしゃらないです。静岡市美術館も、最初は英語のご案内などもつくっていたのですが、あまりにも人数が少ないのでやめてしまったのです。

そういうのが現状なので、外国人をターゲットというからには、それなりの表示をするとか、ご案内をするとか、解説のものがあるとか、いろいろなことを考えないと、外国の方に来てほしいと言っているだけでは駄目だというのを実感しました。

ここの最初のところで気になったのですが、外国人、海外と書いてあったのですが、中高年は金もお時間もありますので、絶対にターゲットにしていくべきだと思います。

○熱川：今、谷先生の話聞いて、なるほどなと思ったのですが、静岡大火の前の静岡はすごく面白くて、江戸時代がそのまま発展していったみたいです。

それから、子どもたち 5 万人が対象となるけれども、僕がイメージするのは駿府城の中にあった児童会館です。われわれは毎日、遊びに行っていたわけです。なぜ行きたいかという、あそこに面白い先生がいて、工作をやったり、会話をしたり、いろいろなことをして遊んでくれるわけです。そういう歴史で遊べるみたいな人たちがいて、巡回展もそうなのですが、僕がこの間行った企画展は、本当に小企画みたいな感じで、毎日何か面白いことをしてくれるボランティアの人たちがいます。児童会館のときは、そんな感じでやっていたのです。そんなものがあると、子どもたちも飽きずに毎日遊びに来るかもしれません。僕らのころは、児童会館が待ち合わせ場所みたいな感じでした。

久能山東照宮は今、外国人がたくさん来て、何カ月か前に初めて多言語のご案内をつくりました。清見寺は、朝鮮通信使の一級品の史料があって、韓国に持っていけば国宝だというふうに皆さんが感激するものです。韓国の大使がこの間来て、「こんなにすごいものがこんなに身近にあるとは思わなかった。感激した」と言うのだけれど、韓国の方は誰を連れて行っても清見寺で感激するのです。

ただ、あそこは住職が一人しかいないので、あそこの宝物館は今、風前のともしびになりつつあります。そういう意味では、この歴史館ができることを非常に期待していますし、保存という意味でも、そんなところをやっていかなければいけないのではないかと思います。

2 峠 6 宿の話がありました。2 峠 6 宿プラスアルファで、中村先生の研究されている駿河七観音という非常に面白い観音信仰があります。個性的な観音さんが幾つもあるのです。そういうものも保存をしなければならぬお寺もあります。行って、見て、面白いということでは、久能山東照宮の前身の久能寺のところから振り返って見ると、さらに深い歴史が感じられます。その辺りの幅広さが欲しいと思います。

実物の話を谷先生が話されていましたが、静岡市もいろいろ調べていると思うのですが、お寺を中心に個人もかなり調べて、いろいろ収蔵されていることが分かりましたが、そろそろ時代が変わってしまうと散逸していってしまいます。僕の本家もそうなのですけれども、そんな心配をしているのを、歴史博物館が受け皿としてやっていくことによつて厚みが深まってくるのではないかと思います。

○委員長：博物館機能の非常に重要なポイントである、資料の収集、保存、場合によつたら修復といったような大きなテーマをご提示いただいたと思います。

先ほどの谷委員のお話にかぶせていけば、確かに昭和 15 年 1 月 15 日の静岡大火によつて、古き静岡の町は完全に燃えてしまいました。ですから、逆に言いますと、まだそのころのことを覚えているお年寄りは大勢いらっしゃるわけですから、ある意味では博物館の市民協働事業として、大火消失前の静岡の街並みを数年間かけて復元するというのも、1 つのアイデアになるかなという気もいたしました。

○松川：今、一部で、駿府城の天守閣を復元しようという動きがあります。この中で駿府城の復元も受けるとか、そのへんの動きと連動して何か考えている部分はございますか。

○事務局：駿府城の発掘調査を、来年度から 2 年をかけて行います。その後、資料整理を行う中で、発掘した成果につきましては、当然今回の博物館の中にも入ってくると考えております。駿府城は、当然展示の中で取り扱うのですけれども、再建問題とは分けて考えていただいたほうがいいと思います。

○森田：先ほど、テーマ性を持った通史展示で、ここのボリュームがやたら大きいのも苦しいねという話もあったのですけれども、以前の委員会の議論では、通史は通史でざっと流しておいて、その中で家康の部分が膨らんでいるというイメージを持っていました。家康に特化したかたちで通史を並べるのはいいと思うのですけれども、毎回これを全部見なくても済むように、さっと流せる部分としての通史の扱いもあるのではないかと思います。

家康のところにも、経済、政治、外交といっぱいいろいろなものがあるのですけれども、これを毎回組み立てて同じものを見せていくのでは飽きてしまうし、違うものに変えるの

では大変なので、今は家康の中で食がテーマになっていますとか、そこも変えていったほうが現実的で面白いと思いました。

今、模型の話がずっと出ているのですけれども、静岡市ですから、「世界のタミヤがある静岡は模型もすごい」と見せられるようなものをぜひ考えていただければと思います。

○谷：先ほど天守の復元の話がありましたけれども、事実確認として、ここの駿府城跡は国の史跡とかになっているのですか。

○事務局：なっておりません。

○谷：そうですか。私の感覚としては、天守台自体がもうありませんので、考古学的に発掘をしたとしても、天守台の下は分かるけれども、天守台の石垣の高さとか、上がどうだったかという史料がどこまであるのかです。国の史跡の場合、上に天守を復元する場合は、図面がないと許可が下りません。しかも木造です。

ここは国の史跡になっていないということですが、根拠なしにどこまでつくれるかはちょっと疑問です。想定復元のようなものは、模型だったら許されるけれども、原寸大のものについては駄目でしょう。ちゃんとした図面があるのなら何も申しませんけれども、学術的な検討を経ないといけません。あちこちでお城をつくりたいという話は確かにありますが、私どももよその市でやっているのですけれども、気持ちと、ちゃんとしたものをつくるだけの根拠は乖離しています。昭和 30 年代ぐらいまでだと、そういうことを抜きにして勝手につくっていましたが、今はそういうことができないということなので、私は、想定模型みたいなものでやるほうがいいと思います。

もう 1 つ、4 のところで感じるのは、議論が深まっていないからだろうと思うのですが、イメージパースでごまかしてと言ったら言い方が悪いかもしれませんが、その程度にしかすぎない情報発信です。私は、こういうものがどんどん拡大再生産されていくことを危惧して、これは、博物館ではなくて博情館だと思います。情報をただ出しているだけで、博物館にちゃんと軸足を置かないといけません。物がないと、お客さんは 1 回見たら 2 回目は来ません。その点がちょっと心配です。

実物というのは、レプリカも含めて実物ということでご理解いただきたいのですが、パネルとか、3D のモデリングは違います。例えば 3D のモデリングは、開館したときから 3 年たったら陳腐化してしまいます。そういうことも考えておかないといけません。賞をもらった建築などでは、できたときの写真が一番良くて、10 年たったらもう見られないというものがいっぱいありますが、それと同じことにならないようにしてください。博

物館は、10 年、あるいは 20 年ぐらいの単位で見せていくものなので、物があることが大事です。

ただ、最初に物が無いというお話もありましたが、物は 10 年ぐらい博物館を真面目に経営していれば集まってきます。もちろん学芸員がいて、いろいろな分野があって、先ほどおっしゃったようにお寺さんとか、そういうところで、今はなかなか不十分なかたちでしか保管できていないものをちゃんと収蔵庫に入れるのです。そういうところへ入れれば、修理もできるし、指定文化財としてもっときちんと管理ができるのです。

そういう活動すれば、10 年たてば相当な資料が集まってきますので、10 年たってもう 1 回常設展示を見直します。そのときにお金をかけて全面的にやり直すか、そこも踏まえて仕掛けをつくっておくかは、これからの工夫次第です。

開館時はどうしても博情館にならざるを得ないところもあると思いますが、あまり最先端を使いますと、「機械調整中」みたいな立て札がいっぱい立っていて、何を見に来たのか分からないようなものになりかねません。そこは注意をしたほうがいいと思います。

私は、庶民の暮らしみたいなものをもうちょっときちんと出していけば、かなりの共感を得られると思います。先ほど委員長が言われた昭和 15 年はいい線だと思います。そこだとまちづくりになるのです。つまり、そのころを知っている人とか、そのころに詳しいデータを持っている人とか、いろいろな人が集まって模型をつくるというまちづくりです。ですから、これはものすごく盛り上がります。その人たちは、自分がつくった模型だという気持ちがものすごく強いので、自分だけではなくて、お客さんや、親戚とかを連れて見に来るのです。

そのぐらいの動きを持った博物館づくりをしないとイケません。学芸員の方が「資料ありませんか」と言って回っていくような作り方はもう遅いと思います。模型づくりなどをうまく使って、かつてのまちの記憶みたいなものを発掘して形にしていくことが、博物館づくりの大きなムーブメントになると思います。ぜひ、それをしていただけたらいいと思います。

○委員長：これまでのお話の中で、細部についてはさまざまなご意見がありましたが、事務局から提案されました一番大本の、家康公を中心とした展示博物館というものを考えます。そこから何が派生していくのか、あるいはそれをどう加工していったらいいのかということについては、さまざまなご意見があるわけです。それらを総合したかたちで、取りあえずはこの歴史文化施設の一番のメインは家康公とすることについてのご了解はいただ

けたということで、よろしいでしょうか。

○委員一同：承認

○委員長：ありがとうございます。

それでは、次の議題に行きたいと思います。いわゆる企画展示、常設展以外の臨時にこういうことをやったらいいとか、それをやるためにはこれだけの空間が必要であるとか、このような心構えが必要であるといったことにつきまして、いろいろなご意見をいただけたらと思います。事務局からは特にないですか。

○事務局：企画展示につきましては、先ほど、スペース的に考えたいというところがありました。次回、諸室構成をお話しするにあたりまして、皆さんから、こういう企画展示が必要ではないかというご意見をいただけると、ありがたいと考えております。

これから博物館全体の面積や動線を検討する中で、皆さまがイメージされる企画展示がどのようなものか、どれぐらいの規模か、年にどれぐらいかけるのかといったイメージがおりでしたら、伺っておきたいと思います。

企画展示のときだけ企画展示室を使うことになると、非常にスペースがもったいないと感じます。そういったことも踏まえて、どういう企画展示が考えられるか、委員の皆さまのご意見があるようでしたら伺いたいと思います。

○委員長：そうしますと、漠然とこんなことがやれたらいいなというイメージでよろしいでしょうか。例えば、モナリザを持ってきたらどうかということですね。

いかがでしょうか。要するに、何か狭い部屋があって、そこで何か成果を随時発表するようなことができればいいなというレベルなのか、よそからそれなりのまとまったかたちの展示を持って来て特別に見ていただくことが必要でしょうか。そのへんも含めてご意見をいただけたらと思います。

○松川：今までの議論の中で、展示しきれない部分が結構あると思うのです。登呂の博物館にも企画展示室がありまして、恒常的にずっと企画展示をやっています。年間通してずっとやっているのですけれども、例えば、フェルケール博物館でやった建徳寺展とか、清見寺の朝鮮通信使、あるいは民俗的なもの、そういう静岡ならではの、ここでは展示しきれないものを恒常的にやっていくようなかたちがいいのではないかと思います。

○谷：ついこの間まで、江戸東京博物館で大関ヶ原展をしていました。これはかなり大きな展覧会ですし、相当の予算を使っていると思いますけれども、例えばそれをやるおつもりがあるのでしょうか。それによって面積とかがかなり変わってきます。

ちょっと分かりませんが、あれだけのものを集めると、借用、運搬、情報とかも全部ひっくるめて展覧会の経費が 2000 万円から、多ければ 3000 万円ぐらいかかるかもしれません。そのぐらいの展覧会をやるのか、もうちょっと地域に密着した小規模なものでやるのでしょうか。もちろん年に 1 回は関ヶ原展をやって、あと何回かは、もっと違うものをやりたいということなのかもしれません。そのへんの落としどころがよく分からないと、うかつなことは言えません。

建物としてやっておかなければならないことが幾つかあります。1 つは面積です。市立博物館クラスですと、500 平米から 700 平米で、大きいところでは 1000 平米ぐらいの企画展示を取りますが、回数の問題とか、全体が分からないので、ここはどれぐらい取れるのか分かりません。

当然、収蔵庫が必要です。あまり小さな収蔵庫をつくりますと、企画展示数があまりできませんので、収蔵庫が広いことが前提です。めどとしては、かつて「博物館法」には、政令指定都市立、あるいは県立クラスの博物館の最低面積は、全部ひっくるめて 6000 平米と書かれていました。大雑把に言いますと、2000、2000、2000 に分けます。つまり、収蔵関係が 2000、展示関係が 2000、学芸員室やホールなどが 2000 というものすごく大雑把な書き方です。

つまり 2000 ということは、収蔵庫が相当大きいのです。だけど、どこでもそうですけれども、10 年、20 年活動すればいっぱいになってしまいます。これはかつての「博物館法」で、今は消えていますけれども、私が堺市の博物館をつくったときには、6000 平米がすごく縛りになっていました。当時、堺市は政令指定都市ではなかったのですが、政令指定都市になったときにクリアしたいということで、6000 平米の館をつくりました。そのときに、大雑把な割り振りはそんなふうにしていました。ただし、2000 平米の展示室には、常設展示と企画展示室が入っています。

その中で企画展示室に 1000 平米も取ってしまうと、常設展示が 1000 平米となって、多分、今日言ったものは収まりません。だから、(企画展示室は) 500 とか、600 があれば順当かなと思いますけれども、もう少し建築の方と相談していただければいいのですが。もう 1 つは天井の高さです。これがちゃんとしていないと、ものが入りません。

民俗資料には結構大きなものがありまして、例えば、お祭りの山車などです。普通、博物館となると、つつい天井の高さをけちるわけです。そうすると、後で入りません。これは常設展示室も同じですけれども、6m ぐらいの高さは取りなさいとよく言われていま

す。これは、何を展示するかを分からないときです。常設展示室は、ある程度ものが決まってきたら、それに合わせて建物を設計させることも 1 つだと思います。

その展示室が 1 室でどうしようもないというのはやめたほうがいいと思います。少し部屋を別々にするか、区切れるようにしておきます。いつも、大関ヶ原展ばかりではないので、幾つかのパーティションに区切ることも必要だと思います。

もし企画展示室が高層階にあれば、地震の問題がありますので、免震装置、防災関係なども考えなければいけません。このごろはケースの中に免震装置が入っているものもありますし、建物自体を免震、制震にする場合もあります。このへんは、文化庁と連絡を取ってやっておかないと、文化庁が知らない間につくってしまうと、国の指定物品は一切展示できません。そこは文化庁とよく相談される場所かだと思います。

もう 1 つは、企画展示室の使い方です。年がら年中やるのは、時間的に一番いいのです。やり方としては、固定ケースが当然あるわけですが、固定ケースの前を仕切って市民に貸し出しています。ケースの中まで貸し出すと、何も知らない人が外から入っているいろいろやっで傷めたりしますので、ケースの中は貸しません。ケースの前にパネルを立てまして、別のケースにしますと、絵画の展覧会や書道の展覧会という市民企画の展覧会にも貸し出せます。

そういうことをするのか、しないのかを最初に考えておきます。極めて一流の博物館はそういうことはしていませんけれども、私のところみたいに市民に支えてもらわなければいけないところだと、秋は貸しているのです。なぜかという、秋にどれだけ頑張っても、うちは 300 ちょっとなら企画展示室がないので、京都博物館とかの展覧会に負けてしまうのです。なので、どんなに秋に頑張っても、うちへ来るはずはないので、むしろそのときは市民に貸し出します。

静岡の場合は近辺にそんなに大きな博物館はないから、秋にちゃんとした展覧会をやっで、12 月に市民展をするといった貸し方もあると思います。昔の 12 月は博物館に人は来なかったのですけれども、最近はそんなに寒くなくなっているんで、12 月も人が出てきます。いろいろな事例を調べられて、企画展示室の使い方、構造、設計を考えていったらいいと思います。

○杉山：まさに今、私たちが展覧会を巡回させようと思って困っていることを、先生が全部言ってくださいましたけれども、600 平米の展示室がなくて困ったのです。静岡には博物館がないのです。巡回展が来たときに、600 平米のスペースがないのです。ホビースク

エアという昔のアートギャラリーだったところももっと狭いのです。ポビースクエアの欠点は、天井高が低いのですけれども、エレベーターも低いのです。だから展示物が入らないのです。今の先生のご意見をいただきながら、本当に基本的なところからお考えいただきたいと思いました。

それで困りに困って、博物館ではない県立美術館の県民ギャラリーを借りて巡回しました。本当に博物館があればなと思うことがすごくあります。そんなに通年で需要があるかと言われると責任は持てないのですけれども、条件がそろえばそういうことがあると思います。

日々の常設展示だけではなくて企画展示をすることによって、学芸員とか、働いている方とか、スタッフのモチベーションが保てるということを現場からはよく聞きます。そういうこともお考えになったほうがいいのではないのでしょうか。

企画展示をやったほうが、予算が取れるということはないのですか。そういうことも絶対に大事だと思います。企画展をやるよということではぱっと予算が取れると、市民にもアピールできるし、みんなもそれなら行ってみようと思うのではないかと思います。

私個人的には、静岡ならではでないものだってやってもいいのではないかなという感覚でいます。

○委員長：具体的な数字が出てきたのですが、600 平米ぐらいを目安に考えて、それ以上に広げれば、ますます結構という感じですか。

○杉山：例えばです。今回は 600 平米必要だったのです。

○谷：いろいろよその博物館にアンケートを採られたら出てきますので、そういうのを参考にされたらいいです。

1 つだけ今のお話と関連するのですけれども、予算は最初にとっておかないといけません。僕は堺にいたときに痛切に感じたのですけれども、1 周年記念展をやったのです。そのときは、彦根屏風とか国宝を 2 点、重要文化財を 10 点ぐらい借りて、お金が足りなかったので補正予算で 1000 万円組んでもらったのです。そうしたら、それが前例になって毎年付くのです。

静岡市は知りませんが、予算というのはそういうところがあります。だから、予算を消化しなければいけないという話もあるのですけれども、最初の方にちゃんとしたものを予算として付けておかないといけません。最初に事務局がびびって、あまりたくさんにしたら付かないかもしれないと思うと駄目で、むしろ最初にたくさん必要です。その

代わり、いい展覧会を最初にやって実績をつくらないといけません。

後々右肩上がりに予算を増やすのは、ほとんど不可能です。だから、最初に一発やるほうがいいと思います。これは事務局の責任です。

○熱川：ものがないという話が出ましたが、例えば久能山東照宮に宝物館がありますが、狭いものですからほとんど展示ができていないのです。われわれは全容を全く見たことがないという意味では、連携してやっていく必要があると思います。

今、徳川家康公顕彰四百年をやっています。ご宗家と大変仲良くさせていただいて毎日のお会いしているのですけれども、ご宗家は美術館を持っていないものですから、4カ所に預けてあるのです。これを活用しない手はないということも頭に入れておいてほしいと思います。かなり好意的に対応してくださるのではないかと期待しております。

②ビジターセンター機能と博物館機能の関連性について

○委員長：それでは、議題 2 ということで、ビジターセンター機能と博物館機能の関連性について、ご協議をいただきたいと思います。

家康公を軸とした展示をやったらどうだということでは、おおよその合意ができていますが、博物館機能とビジターセンター機能が関連性を持った施設をつくっていかなければいけません。その場合に、ビジターセンターの機能にはどんなものを与えていったらいいのか、ビジターセンターはどんな役割を担っていく必要があるのかといったことについて、ご意見を頂戴したいと思います。

○杉澤：ちょっと漠然としているのですけれども、先ほど谷先生がおっしゃった考え方は非常にいいなと思いました。

私が静岡のほうに旅行に来たと想定して、その横に駐車場があったとします。そこにバスを置いて、静岡の町を観光する中心地にするという考え方がいいと思っています。

そうしたときに、ビジターセンターに谷先生がおっしゃった模型があれば、「ツアーや団体は入っていないけれどもちょっと行ってみようか」みたいな動きが考えられるのではないかなと思います。

そういった観点で、どういうビジターセンターがいいのかは思い付いていないのですが、ざっくり言えば、静岡市美術館で外国人が来ないという話があったと思うのですが、これ

が団体だとすると、バスを止めるところがないという問題にぶち当たってくると思うのです。それをもし解消できるのであれば、全体の活性化にもひも付けてできるのではないかなと漠然と思いました。

○委員長：そうしますと、ビジターセンターの内容ももちろんなのですが、一度に大量のお客さまを入れ込むための駐車場の問題です。特にバスですね。これについては、どうしても考慮しなくてはいけないということでございました。

○櫻井：前の資料に、観光インフォメーションコーナーみたいなもの話があるのですが、私は必要だろうと思います。来た人がここに行くといろいろな情報が得られるという意味で、インフォメーションコーナーです。前回は言いましたけれども、歴史に関するツアーのようなものがそこに示されていて、そういう対応ができるようなコーナーです。

それと、私が先ほど、家康公以前の歴史が少ないという話をしたのは、やはり静岡市の博物館は静岡市民のものであってほしいからです。確かに外国や外からの方が大勢来てただかなくてはいけないのですけれど、静岡市民が親しみを持って何度でも行けるようなところです。

そうすると、地域のところを充実させるということだったのですが、地域の語り部のような方が来て、お話をしてくれるようなところです。学問所という話がありましたけれども、学問所というような学習スペースです。どなたかが来て、話をして、それを聞けるようなスペースも、ビジターセンターの中にあれば良いと思います。

○松川：集客となると、買い物、食事、体験が中心になるだろうと思います。本施設との双方向性と、他施設への発展性も考えていかなければならないと思っています。

どんなことにしても、インパクトがあって分かりやすいという意味で、静岡らしさを 3 つの方言で考えました。「みるい」「まめったい」「ぬくとい」です。「みるい」でお茶の文化にフォーカスさせます。「まめったい」で、静岡のものづくりにフォーカスさせます。「ぬくとい」で、静岡の食文化にフォーカスさせます。そのように静岡らしさをインパクトあるかたちで分かりやすくして、メインは買い物、食事、体験です。そして、本施設との双方向性、他施設への発展性を狙っていったらいいと思います。

○今村：今の松川委員のお話に基本的に私も賛成なのですが、ビジターセンターだけに来ることを考えていた人を博物館に引き込んでいく仕掛けが、必要なのかなと思います。

例えばホビーショーで、模型に興味を持って来る方は静岡にたぶんたくさんおられると

思います。静岡市の模型とともに、現代の静岡における模型産業の話で簡単な展示を行って、その歴史性を探るためには歴史文化施設のほうもどうですかとか、お茶の試飲コーナーで、近代の茶と、近代以前の製法でつくった茶が復元できるのであれば、それをつくってにおいて、歴史を詳しく知りたいならば、こちらへというかたちの仕掛けが必要なのかなと思いました。博物館との関係に関するものです。

どう考えればいいのかと思うのは、ビジターセンターとこの施設が複数階の建物だったら、ビジターセンターを 1 階にするとか、ビジターセンターを上の方に置くのかということで、博物館とビジターセンターをつなぐ動線の問題もすごく大事だと思いました。ここまでは無料で、ここから上がっていただくときには有料とか、どういうかたちにするのはまともっていないのですけれども、ちょっと気になりました。

○委員長：イメージとしては、ビジターセンターは原則無料で、博物館はいくらかを頂くことでいいのですね。

○森田：今の今村委員のお話とも重なるのですけれども、ビジターセンターは、歴史に興味があって来る方ではない方たちを想定すると思うので、その方たちに、いかに歴史が楽しいというアプローチができるかという部分が重要だと思います。

最初に出ていた谷先生の案が来ると、「あ、歴史は面白い」と言ってそっちに行ってしまうのではないのでしょうか。お金がかかるものでも、それぐらいのインパクトのあるものを無料コーナーにどんと持ってくるぐらいの覚悟は必要なのではないかというのが 1 つあります。

もう 1 つは、市民でも気軽にそこを待合の場所に使える居心地の良さです。いろいろなことを含めて、ボランティアさんの活動に頼らなければならないことは多くなると思うのですけれども、例えば、案内のコーナーにパンフレットだけが置いてあっても分からないので、一言案内してくれる人がいてくださるとすごく理解できるし、すごくおもてなしを感じると思うのです。それも含めて、そこで作業をするスタッフの方にも、そこにきていただく方にも、地元の方にも、外の方にも、ボランティアさんたちにも居心地のいい場所です。私は居心地がいいというのが静岡らしいところだと思っていますので、ぜひそういう空間にしていきたいなと思います。

○谷：私は、このビジターセンターは何をターゲットにしているのか、どういうビジターなのかがよく分かりませんが、恐らく市内、市外、県外、海外、小学生、全部が対象でしょう。

この 3 月に堺でオープンした「さかい利晶の杜」は、私もかかわったのですが、半分ビジターセンターで、半分利休と与謝野晶子の展示室があるものです。その経験からいくと、堺の中心部の昭和 10 年ぐらいのかなり精密な模型をつくりました。それは無料コーナーにあるのです。その奥に有料の利休と晶子の資料館があるのです。この間、電話をしたら、大体 20 万人が来ましたと言っていました。3 月の末にオープンで、初年度ですからご祝儀も兼ねてそんなものかなとは思いますが、けれども。

そのときに、その後の使い方とかを見ていて感じたことが 2 つありました。1 つは、喫茶店をつくったのです。喫茶店というよりも、立礼（りゅうれい）をつくったのです。ちゃんとしたお茶室もあるのですが、そこのお茶室はなかなか利用しないけれども、立礼でちょっとお茶を飲むというのは相当人気があるらしいです。利休のふるさですからそれはお抹茶ですが、ちょっといくらかは忘れましたが、お菓子もあります。いわゆる喫茶店ではなくて、少しお茶に特化した喫茶店です。これは駅前などにもあると思うのですが、ここでしかないものが必要かなと思います。

実は、「さかい利晶の杜」のすぐ横にはスターバックスがありますけれども、そこは一切、お茶は出していないです。向こうの方針としてお茶は出さないらしいので、すみ分けています。

もう 1 つは、観ボラと言っていますけれども、観光ボランティアです。観ボラが、「さかい利晶の杜」ができる前からありました。堺の町も空襲にあって残っているところは南と北の端なのですけれども、真ん中を路面電車が走っていますので、それに乗りながら、堺の町を案内するボランティア活動が数年前から活発になっていました。そういう人の拠点にするわけです。ですから、路面電車に乗ったり、歩いたりしますけれども、「さかい利晶の杜」から町の中を案内してくれるのです。

そういうふうなしくみを、あらかじめ先につくってしまうということです。できてから観光ボランティアを養成するのではもう遅いです。できたときに、私の案だと、そういう模型があって、そういうのを目当てにやってきたいちげんさんでも何でもいいから、そういうのを捕まえて、「これから半日あるのなら、A コース、B コース、C コース用意しています。1 日あるのなら東照宮へ行きましょう」とか、「もうちょっと短いのなら、こういうのがありますよ」と付いていくわけです。そういうボランティアさんをちゃんと養成しておけば、おもてなしにかなりなると思います。

そういう 2 本柱みたいなものです。まずひとつは、食べるところです。重いものを食べ

るまではいかないけれども、ちょっとした喫茶店のお休みどころは必要です。2つ目としては、そこから次へ行くというので、パンフレットを置くだけではなくて、人の手で案内をすることです。

よく、オーディオを付けたり、機械化しようとするけれども、これからの時代は人のもてなしです。そういうもてなしの人たちを多数養成していくことが、たぶん大事だと思います。

注意しなければいけないのは、いろいろなものを出展させると、地元のこのあたりで商売している人と下手をするとバッティングして、民業圧迫になります。このところは相当注意しないと、よくこういうので物産コーナーみたいなものをつくるのですけれども、地元から文句を言われます。僕は、そこまでしなくても、こういうものがあれば人は来るのではないかと思います。特産品は、この周辺の地元で買ってもらったらいいいと思います。そのへんのコンセプトをはっきりさせておく必要があると思います。

○委員長：そのボランティアは、全く無償ですか。

○谷：観光協会が養成した側面がありますので、観光協会がボランティアのグループに出しています。私どもの博物館のボランティアは全く無料です。交通費も一切出しません。本来、それが一番いいと思うのです。そうしないと、予算の関係で市役所からいろいろ言われて、途中で予算を切ったりする場合があります。そうすると、有料でやっていたボランティアは大混乱を起こして、もらう派ともらえない派とかに分かれてしまうので、ボランティアのつくり方は最初にしっかりと議論をしたほうがいいと思います。一番いいのは無料です。本当に自分の研鑽というか、それをこういうことでやることによって、交流にもつながっていくという高い精神をつくったほうがいいと思います。

○委員長：細かい話でしたけれど、例えば、ちょっと郊外までご案内をするときに、ボランティアの証明か何かを持っている人は、無料で交通機関に乗れるぐらいの支援はあるのですか。それも分かりませんか。

○谷：そこは分かりません。それは当然やったほうがいいと思います。そうしないといけないでしょう。入館料まで自分で払っていたら駄目だと思います。

○委員長：それは、地元の交通機関とのいろいろな問題があるのでしょうかけれども、せっかくだから、できるだけ活性化する方法を考える方向がベストではないでしょうか。

○森田：ボランティアの方は、歴史とか、観光とか、自分のまちのことを語りたい方がいっぱいいらっしゃると思いますので、ボランティアさんを大事にしてもらわないといけませ

ん。あなたたちが勝手にやっているのでしょうみたいな感じとか、ボランティアの控え室がすごく冷たい感じだったり、そういうのは良くないと思うのです。だから、私たちが、静岡のために頑張っている人たちをちゃんと認めてあげられる、お金ではなくて、気持ちで認めてあげられる部分がきっちりできていればいいと思います。そこに行けばいつも大事にもらえる場所がビジターセンターであれば、絶対長続きすると思うので、お金ではなくて継続できる方法を考えることが重要だと思います。

今、私が運営委員長をやっている静岡市文化財資料館は、なかなか人を案内しづらい小さいところなのですが、誰もいなくてただ見てくださいと言っても、間違っちゃった倉庫みたいな感じなのですが、館長さんがしっかり 1 つずつ案内してくださるので、すごく充実しています。つまり、やっぱり人だと思えるのです。だから、むやみに設備にお金をかけるのではなくて、どれだけ素晴らしい人を育成できて、その人たちを大事に守り続けられるかにかかっていると思います。

その文化財資料館で昔のお菓子を展示する展示会をやったときに、すごく人気があってたくさんお客さんがみえました。呉服町にも今はなくなってしまった昔の名店があるので、「あ、このお菓子があった」というのがもしここで食べられたら、それだけでも人は来ると思います。

○松川：今、観光ボランティアの話が出たのですけれども、駿府ウェイブという組織がありますね。あれはどういう組織ですか。既に活動されている組織なのですか、市の中にあるのですか。

○事務局：コンベンション協会のほうで活動していただいているボランティア組織になっています。それこそ駿府城公園に来ていただいて説明をしていただくとか、浅間神社等で説明をしていただくかたちにもなっています。

今は、うちの課としましても文化財サポーターという制度を設けまして、文化財のことを知っていただいて、将来的には博物館のことを運営できるようなかたちでボランティアを養成しています。そういう方々を育成することによって、今のご意見のようなかたちでの反映ができると考えています。

○熱川：駿府ウェイブはお付き合いがあるのですが、歴史文化施設候補地である場所に、コンベンション協会があり、その 1 室に拠点があります。最初は観光協会の講座で育てていらっしやったのですけれども、今はほとんど自主的な講座で、市民向けに自分たちの会員を増やしていこうということで勉強しています。われわれがコンベンションをやったと

きにも来てもらって、説明してもらって、役に立つ方々でした。

○委員長：このボランティアの皆さんにどれだけご協力いただけるかは、これからの施設にとって極めて大きな意味があると思います。今は違うかもしれませんが、概して「ただあの衆を使えるからいいや」といったイメージで対応したら絶対駄目だと思います。先ほどから出ておりますように、博物館創設準備以来の深いかかわりを持ったかたちで静岡市にも、またこの施設にも愛着を持って、みんなに喜びを分け与えたいという気持ちの方をどうやって育てていくかは、すごく大事な問題だと思います。これはぜひ、施設以前の問題として考えてもらわなくてはいけないと思います。

○櫻井：今のボランティアのお話ですが、ボランティアの方がそこにいてその方が連れて行くのも 1 つなのですが、各地域に詳しい人がいるので、そういう人たちに役割を渡して話をしてもらうことも必要ではないかと思います。その人たちも来て勉強できる施設が必要だろうと思います。

お茶の話がちょっと出たのですが、静岡にはお茶インストラクターさんが大勢いらっしやいますので、そういう方たちもボランティアとしてやっていただけるのではないかと思います。

レストランもいいのですけれども、私はお弁当と書いたのです。JA さんがつくっている、生産者と消費者が菜っ葉について話をするという「生消菜言（せいしょうなごん）弁当」があるのですが、生産者と消費者が共に考えてつくったお弁当です。それは結構好評なのですけれども、そういったお弁当を置くとか、鯛飯とか、大御所弁当といった静岡独特の弁当を出してもいいのではないかと思います。

物産で「しずおか葵プレミアム」というものがあるのです。毎年、静岡の特別な品物を選んで「しずおか葵プレミアム」として発表しています。それはどこでやっているのか分からないのですが、「しずおか葵プレミアム」のブックカバー「ひいな」が市の広報「静岡気分」に載って、手に入れたと思ったのですけれども、売っている所がありません。わざわざ製造販売元のところまで買いに行きました。松木屋さんの「うさぎ餅」もそうです。そういうものを販売する場所があったらいいなと思いました。

○今村：ボランティアとのつながりも大切だというのは、私も大賛成で、相互に育てられ、育て上げていく関係は素晴らしいと思います。

具体的にここまでするのはどうかと思うのですけれども、時間を決めてこの日は久能山ツアーとやるとか、曜日とか日によって、8 月の終戦記念の間近だと、平和資料センター

と連動して体験者の話が聞けるとか、そういった分けをすることで、さまざまボランティアの方がたくさん来られても、競合してしまって収拾がつかない状況にならないようにすると良いと思います。そのあたりも、博物館として全部かかわっていくと大変だと思うので、どこまでかかわるかある程度の整理と、こういった所にこの日だったら行けますよという導きが必要なのかなと思います。

そのときに、交通機関で、例えばこの日に関しては直通バスをつくってもらおうとか、そういうこともあり得るのかなと思いました。

○谷：僕は、博物館とボランティアを切り離すのは良くないと思います。極端に言えば、このボランティアは博物館のボランティアであって、このビジターセンターのところで頭出しをしていて、地域も案内するとか、それぐらいにしないと、博物館はまた新しいボランティアを募集しなければいけないことになってきます。それでは二重になってくるので、最初から一体的に運営して、博物館の中でやりたいボランティアを呼ぶのです。

静岡の方の気質はよく分からないのですが、大阪の場合によくやるのは何月何日何時から何時までと決めてしまうのですが、うちのミュージアムでは一切やっていないのです。自分が来たいときに来てくださいと言っています。だから、日曜日にたくさん来るけれども、平日はたくさん来ないのですが、そうしないと、主婦の方は 5 時とかにするところなのです。3 時半ごろまでで帰りますとか、朝、ちょっと調子が悪いからきょうは来ませんということも必要なのです。

そこは、静岡の方の県民性みたいなものが出るかと思いますが、大阪の人はそうやってやると、みんな来なくなります。だから、言い方は悪いですが、僕は放し飼いと言っています。

それと、お釈迦様の手の上で、自分のやりたいパフォーマンスができて、それが観光につながっていくところが大事だと思います。シニアボランティアの方は、それまでのいろいろな仕事を背負っておられるので、僕らが気付かないところを気が付けてくれる人もいます。1 例を挙げますと、もともと車のセールスをやっておられる方で、彼は、ポスターの貼り方や、チラシがなくなっているところをチェックして、地下鉄の 42 駅を回って、この駅は、この展覧会ならもうそろそろなくなっていますとか、手帳に書いてあるのです。そういうところも、うちのボランティアがやっています。

だから、ボランティアさんのやることを一元的に観光案内だと決め付けしないで、その人の経歴を踏まえて、何ができるのかということをいろいろ考えていくといいでしょう。う

ちでは浴衣の着付けをやっていますけれども、着付けで人前に出るのは嫌なので、破れたところを縫うことがボランティアの仕事でした。そのことで、自分は外国人が浴衣を着るための国際貢献、国際協力をしているのだ、くらいの位置付けをしてあげます。

だから、ボランティアの一人一人を見てどういうふうに動くかをコーディネートするのは大変ですけども、それぐらいのボランティアができれば、ボランティアさんはお金がなくても、交通費を払わなくても寄ってきます。そういうことができれば、このビジターセンターの魅力はものすごく高まります。まさに市民ぐるみのことを実験的にやってみることが僕はすごく面白いのですが、こういう博物館だとできるのです。

○委員長：大変面白い、示唆に富んだお話をいただきました。言ってみれば、ボランティアさんたちのたまり場みたいな空間があって、そこで随時、気の向いた方が集まれば、外に向かって立派なお仕事をしているというのも、非常に面白いのではないかと思います。

○谷：先ほど、1 階がビジターセンターで上階に博物館があるという想定をされていましたが、建築の立場からいくと、1 階に必ず博物館の入り口がないと駄目です。階段を登っていったら博物館の入り口があって、受付があるのは駄目です。

上の階に上げるのはエレベーターとか、エスカレーターとかいろいろな装置があるので、ともかく同じ階に入り口があって、その中に入れてしまいます。入ったら、上の階までまず運んでしまいます。これはシャワー効果で、下りてくるのは割とみんな抵抗がないのですけれども、上がっていくのは、特に僕らみたいに年を取ってくるとだんだんつらいのです。そういう仕掛けを、施設の設計の段階でちゃんとつくってしまいます。

それは、例えばシースルーエレベーターみたいなもののほうがいいかもしれません。そこまで言うと、ひょっとしたら景観問題になるのどうかつなことは言えないのですけれども、県庁があんなにでかいものをつくっていますから、そんなに高くはないでしょう。ある程度お城が見えることも大事です。そういうことを、建物としての仕掛けを上手に設計するということから思いました。

○委員長：今日は展示の具体的なアイデアやビジターセンター、特にボランティアの皆さんの活動のありようについて、大変示唆に富んだお話をいろいろしていただいたと思います。

今回は、より具体的にそれぞれの展示の内容にかかわった部屋の配分や、もっと具体的な話を詰めることにしていきたいと思います。

ここである程度まとまっていったものは、いずれパブリックコメントというかたちで、市民の皆さんにも見ていただくことになると思うのですが、大きな関心を引き付けていくうえでも、できるだけ魅力的なお話を、次回、皆さま方にさせていただけたら大変ありがたいと思います。

今日は特にまとめということもございませんが、最低限、徳川家康公を中心とした、大御所を中心とした展示を軸に考えていこうということです。ビクターセンターのありようは、博物館と一体化したかたちでどのように位置付けていくかという、非常に重要なポイントを指摘されたと思います。

○司会：長時間にわたり、ご審議をいただきまして、ありがとうございました。

今日は、企画展示の面積はどれぐらい必要かというお話もいただきました。また、ボランティアのお話も大変参考になりました。そういったことを踏まえまして、次回は諸室構成、運営形態などの話に入っていきたいと思っております。

それでは、以上をもちまして、第 2 回静岡市歴史文化施設建設検討委員会を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

(終了)